

会議名	令和5年度	開催日	令和6年2月29日(木)
	第2回台東区立図書館に関する意見交換会	時間	午後7時～8時40分
		場所	生涯学習センター504教育研修室
出席者	<p>大串夏身委員長(昭和女子大学名誉教授) 野末俊比古副委員長(青山学院大学教授) 田島大輔委員(公募区民) 森真奈委員(公募区民) 福沢俊之委員(台東区立御徒町台東中学校校長) 佐藤有理子委員(台東区立東上野保育園園長) 永田晴久委員(台東区社会教育団体協議会理事長、台東区写真連盟理事長) 三瓶共洋委員(台東区教育委員会生涯学習推進担当部長)</p>		
配布資料	<p>配布資料 資料1「機能強化検討の方向性について」 資料2「図書館におけるDXに向けた取組み」 資料3「電子図書館サービスについて」 資料4「令和4年度・5年度 台東区立図書館意見交換会 意見のまとめ」 資料5「図書館意見交換会 参考意見」</p>		
内容	<p>1. 開会 配布資料の確認</p> <p>2. 議事</p> <p>中央図書館における機能強化について ・図書館のDXに向けた取組みについて ○資料1～3について、事務局から説明</p> <p>【委員長】 今の説明について何か質問があるか。 音声で蔵書検索をするというのは、すでに25年ぐらい前、国会図書館が開発したものがあつた。 ロボットを使った不明本の探索などは中国ですでに使われていて、日本でも江戸川区立篠崎図書館で実証実験をやつた。ロボットに図書館の利用について回答させるというのは、今でもやっている。 ウォークスルーは、和歌山県有田川町で実証実験やり、今も活用されている。大学図書館では立命館大学で使っている。 大学図書館と公共図書館では、条件違うので、公共図書館でトラブルなくどれぐらいいけるかというのはある。 電子図書館は、システムによって読みにくいものも読みやすいものもある。 質問が特になければ、次に進める。 事前に参考意見として資料をまとめてくれている委員に、この資料について説明いただきたいと思う。</p> <p>【委員】 昨今、DXというのは技術的には必要なものということで、DX関連のコンサルティングなどを仕事でやっており、こういった資料自体はいつも作っている。 今回はそれほど時間をかけずに書いているので、端折っている部分もあり、参考までに見ていただきたいと思う。</p> <p>まず、電子書籍は、コストの問題があるのはわかつてはいるものの、やはり何かしらターゲットを絞つてやればいいのかと個人的には思う。 これは私自身の要望だが、リスキングというターゲットにして、ビジネス書などタイムリーに借りられた方がいい。 また、資格関連の図書は役に立つのではないかとと思う。 利用促進という意味では、先ほどベストセラーが高いとか入つてないとあつたが、やはり新刊書籍が速やかに使え</p>		

るというのが一番のメリットかと思っている。

当然今人気な書籍などは、何十人待ちになっていると思うが、電子書籍では待ちがないというのが本来メリットなはずなので、コストの問題はあるにしても、やはり待ちがなくなるような施策が必要かと思う。

また、電子リーダーというか、アプリケーションというかわからないが、それが使いやすくないと、全くもって使われないという話になるので、そこは必須だと思っている。

チャットボットは、極論すると何でもできるので、アプリケーションサービスは施設だけではなくすべてに対して対応することが可能。

先ほど音声で検索できるとお話いただいたが、検索してそのまま予約もできる。

イベントのワークショップの予約などにも使えるかと思う。

利用促進というところは、やはり使い勝手が一番ポイントなので、いわゆるUX、使いやすい画面など、昨今のユーザーのことを考えると多言語も必要かと思う。

また学校など、ユーザーが多いところでの講座や、動画を作るなどをやるといいのではないか。

次にDXについて、まずこういうことをやるにはお題というか、ゴールが何かというところからやるので、台東区としての目指す図書館がこうで、今回のターゲットとなっている中央図書館の機能改善のコンセプトがこうで、こういうところのゴールを目指すためのDXというところを考えるべきではないかと整理した。

まず、図書館サービスということで、誰もが使いやすい図書館というところをもう少し分解した。「誰もが」の「誰も」が「誰か」という定義、今回は勝手に私が定義しているが、本来は、皆さんのご意見をいただいて決めていく。実現内容も、仮説として置いているが、誰もが利用しやすいというところをいわゆる制限をなくすということで物理的な移動の制約や、利用時間の制約、身体的な制約などをなくすというのがゴールかなと設定した。

その対象者と制約からどういった実現サービスを検討するかを整理した。

それぞれのターゲットのユーザーにヒアリングやアンケートをして、困っていることや要望を抽出し、それに対してどういったサービスを提供するかを考えるのが本来のステップだが、今回は仮置している。

子供、子育て家庭、高齢者、働く人、障がいがある人、外国人、そういうターゲットのユーザーを設定して、それぞれの制約をなくすために、どうしたらいいのかというのを、アイデアとして埋めている。

例えば子供では、物理的な移動制約をなくすというのは、基本的にネット予約であるとか受け取る所の多様化、例えば学校での受け取りができる、そういったものがないのではないか。

もう一つは、電子図書館というのは、すべてにおいて制約を取り除く手段であろうと考えている。

利用時間の制約をなくすには、同じようにネット予約・電子図書館・自動での問い合わせ対応というのがある。

ターゲットが変わっても、大きく変わらないと自分で整理して思っていた。

逆にDXは、顧客観点だけではなく、運営する側というところの観点も必要かと想像した。

それを楽にさせるためにはどうするかというところで、これも同じように本来は具体的なところをヒアリングして、それに対してどうするかということを考えるステップになる。

新規・変更・更新が楽になるのは、今はカードを発行しているが、電子的なものにすればいい。

デジタルであれば発行業務はなく、紙など物理的なものを発行しないので、環境にもやさしいといえ、なおかつ作業も楽になるはずである。

書籍管理は、観点が違う。今も利用実績のデータで、頻出の図書は見やすいところに置くとか、もう少し買うとかやっていると思うが、データを活用することで効率的に、人があまり考えなくてできることもあるかと思う。

同じように新規の納品の管理なども、そういうデータを使うことができるかと思う。

今整理した内容から、何ができればいいか、「対象者と制約からの実現サービスの検討」ということからネット予約・受け取り場所の増設・電子図書館・自動問い合わせ対応などをどのように実現するかで、図書館の利用者側のアプリケーションとして、何かしらまとめて実現できると便利だとか、運用側も同じような形でシステム化できるというのではないかと思い整理した。

最後は、AIをどのように活用すればいいのかというところだが、まずコンテンツの検索というのは先ほど音声という話もあつが、ご存じの通り2年前にチャットGPTが出てきて、人に聞くような形であいまいに質問しても答えられるようになってきているのでそういうところも使うといいのかと思う。

その検索のときに、システム的な話だが、ベクトル化といい言葉を数値にすることができる。

数値同士を比較することで、より精緻に比較や検索ができる機能があるのでそういったものを活用するといいかと思う。

言語間、多言語に対応する点では、メジャーな言語であれば、要望というのはほとんどシームレスに対応できるし、翻訳や英語のドキュメントに対して日本語で質問し日本語で答えさせるということも、何もしなくてもできる。

同じような問い合わせの対応サービスも、多言語モデルなどいろいろできる。
AIチャットボットは、いろいろな仕組みがある。
一つだけ言えることは、本当に使えるものにするためには、設定や学習させるのがとても大変。
ただ、LLM(大規模言語モデル)ができたことによってRAGという仕組みがあるが、これを使うと、例えばマニュアルなどを登録するだけで、質問に答えさせることができる。
なのでシンプルな利用案内などは何も設定せずに使える。
レファレンスも同じように履歴などを学習させることでいわゆるAIの学習というやり方もあるし、RAGは同じような仕組みで登録してすぐ使うこともできる。
昔に比べるとAIチャットボットを使うというハードルがとても楽になったというところが大きな違いかなと思う。
この瞬間新しいモデルのAIが出てきて、もっと便利になるかもしれない。

【委員長】

今の説明に質問などあるか。
我々のような初心者にしてみると、言葉の段階から講釈をいただかなければいけないところもあるが、そういうことも気にせず、何かあれば、質問を承りたい。

【委員】

資料の中で、DXに向けた取り組みのゴールをどこに置くかが重要だという話があったが、図書館内をDX化していくことよりも、区民の暮らしのDX化を図書館が主導していくようなところの方が意味があるように感じている。
具体的に言うと、例えばオーディオブックについて、私も体験しないと良さが全くわからなかった。
一度使い、何と快適なんだろうととても衝撃を受けた。
まずその体験を館内でできるというタッチポイントが一つあってもいいのかと思った。
放送で聞く読書をするのか、ヘッドギアを貸し出して、本棚を見ながら読書も同時に楽しむなど。
自宅で聞けるということ、オーディオブックの貸し出しの目的にしていると思うが、まず、体験があつての自宅で聞けるになる方が多いのかなと思うところ、台東区民割引みたいなもの事業者と台東区で提携して買えると、暮らしがDX化していく。ひいては読書人口増やすようなところに繋がるのではないかと聞いていて感じた。
また、AIを利用したチャットボットによる自動対応については、職員に聞くよりむしろわしいと全く使いたくないと区民は感じるの、AIを使いたいという利便性を、図書館としてしっかりアピールできると、利用者の促進に繋がるかと思っている。
現状の検索機について、両手がふさがっている時に手で操作するというのは少しストレスを感じるの、そういう意味では、音声認識のオプションがあることは重要かと思う。
AI側からの、「何に関する質問ですか。以下からお答えください。」という電話音声のような誘導があるUIにすると、より浸透していくのかと思う。

【委員長】

今の意見に何かあるか。

【委員】

私も音声のものはいいかと思うが、使ってみないとわからないのはおっしゃる通りだと思う。
経験させるという意味では、確かに図書館で経験できたらいいと思う。
そういうところを増やして、より図書館を身近に感じてもらうという一つのアプローチとしてはとても大事なのではないか。
ユーザーの方に意見を聞いて「こうだったら便利」と、先ほどの両手が塞がってストレスだとか聞かなければわからないので、とても貴重な意見だと思う。
どういうアプリケーションにするか、技術的にはほぼ、今おっしゃっていたことは可能なので、一つずつ実現できたらいいのではないかと感じた。

【委員長】

まだ発言していない方で、何かあれば、一言ずついただきたい。

【委員】

本をよく借りてはいるが、一つ一つが見にくく資料を探すまでに苦勞するという経験、特に自宅でパソコンでやっても、思うような検索ができないということがある。
例えば、時代小説を読むときに、シリーズ物で1から20までなど、名前で検索するとどれが何番だかわからない。

最後が見たい場合、それをいちいち探すと意外と手間がかかる。
できれば、名前で検索したら、1が何とか、2が何とかというふうに見られるようにして、これが欲しいんだという形が、できたらわかりやすい。
いちいちタイトルを入れないと、それにたどり着けないということがあった。

【委員長】

それは目録の取り方の問題で、議論があるところ。
個別タイトルを先にとるか、シリーズを先にとるかというのがある。

【委員】

いわゆる著作名で検索するとずらっと出過ぎて、どれが何番だかわからない。
それでも、何とかシリーズの1とか2とかついていればわかりやすい。

【委員長】

我々図書館員も最初はそうだった。
国会図書館が導入するときに、個別タイトルでいくのか、それともシリーズでいくのかという議論があった。

【委員】

こんなふうにもいろいろと便利に使えるのだと、知らないことばかりで感心して聞かせていただいた。
子供を育てる保育園の職員という立場で言うと、子供たちと図書館へ行ったときに、みんながいろいろな本を手にしてわくわくした感じで見ていた。
絵本をデジタル化し、表紙の絵など子供たちがわかりやすい形で、お家の方を介して選べたり、身近なところで手に取れるような形ができると、絵本の楽しみが広がるのではないかというふうに思った。

【委員】

学校ではまだ教科書を持ち歩いて重たいかばんを持って登校している。
先日インターナショナルスクールの生徒にどうしているのか教科書を持ってきて欲しいと言ったら、教科書は一冊もないと言っていた。
教科書もノートも何もなくて端末一台を持っているだけと。
例えば成績記録表とか通知表も全部ネットで送られてくるだけで、今の公立中学校と全く違う世界がそこにはあった。
学校では一人一台の端末が入ったが、教科書を持って帰って家で勉強する。
朝読書のときに紙の本を読んでいる。
中学生が図書館を利用していくようになったときに、学校がそうではない環境が現実にある。
子供たちが卒業した後に、そうした図書館を活用できるような形であって欲しいと思うのと同時に、少し学校と乖離があるような感じが正直印象としてはあった。

【副委員長】

うちの大学に革新技术と社会競争研究所というDXの研究所があり、その副所長をやっている。
横浜市の図書館のAIの話は、大学の研究所と企業との共同研究で開発したものである。
公共図書館の蔵書検索にAIを使ったのは日本初で新聞や雑誌にかなり取り上げられた。
1月15日から稼働している。
ホームページで検索できるので、使ってみてほしい。
まず電子書籍については、資料でポイントについてまとめてくれている通り。
メリットがないとやる意味がない。
現在、圧倒的にタイトル数が少ない。
全国公共図書館どこに行っても最初は面白いと言って飛びつくが、数が少ないので使われなくなる。
だから、コストパフォーマンス的にはそんなに無理しなくてもいいと個人的には思う。
もう少し様子を見て、メリットが見えてくるようなところでやる、またはそうなるように働きかけるというところがポイントかと思う。

AIのチャットボットは、おっしゃったように作り込みが大変。
これもチャットボットを入れればいいのではなく、何のために入れるかと言うことを考えないといけないと思う。
スマホを使った貸出カードはこれからそちらが主流になると思う。

これに一步先のものがある、資料にはないが顔認証。
日本で一番初めにやっているのは、兵庫の武庫川女子大学が一般公開でやっている。
地域の人たちが来て、顔認証で入って借りて帰るが、苦情はほぼゼロ。
顔を覚えられるのは嫌じゃないかと思うが、カードを持ってこなくてもいいので忘れ物がなく、悪いことするわけではないのでほぼ抵抗感なく使え、図書館側も発行しなくていい。
まだ少しコストの問題はあるが、多分広がると思う。
日本はスマホを皆さん持ってるのでスマホでもいいが、顔認証はもうすぐ広がると思う。
AIの話は、日常会話の文章を入れることよりもキーワードマッチングで見つからないことが見つかることがポイント。OPACで検索しようとしても、知らない分野だとキーワードを思いつけないので、適当に入れていくと向こうがお勧めしてくれる。言葉が違っていても見つかっていくところがポイント。
これも広がると思うが、チューニングがとても大変で、本のデータに合わせなければいけないので、実は意外とコストがかかる。ここにチャットGPTを加えるとさらに高くなる。
いいものを求めるとコストはまだまだかかるという印象があるので、狙いを定めるというのはとても大事だと思う。
泉大津市のロボットは、地元でロボットでとても有名な企業があり、そことタイアップしてやっている。
それは結構大事で、地域にそういうIT、ロボット、テクノロジーに強い企業があると思うので、そういうところと一緒にやっていくことに意味があるかなというふうに思う。

ウォークスルー型は立命館大学が10年ぐらい前に初めて作ったが、まだ高い。
そこまでメリットがあるかどうかというのは、見極めが必要かなという感じがする。
障害を持った方の話では、聞く読書。
データ化されてるものは聞く読書ができるが、読みたい本が何でもできるわけではない。
あるシステムでは、本をバラッと開くと、ここが柱とAIが認識して、読み上げてくれる。
本のどこが本文かというのは実はとても難しいがスマホ一台でできる。
先ほどゴールという話があったが、ゴールということを出発点に戻って言うとニーズという話になる。
必要性があるところからやるべきで、必要性がないところは手をつけてはいけない。
何が今一番必要か、一番困ってる人が誰で、どこを最適化するのかということを見極めて優先順位をつけていくということが大事。
もう一つDXで大事なことは、図書館に来ていない皆さんという話。
今、区民の登録率はどのぐらいか。

【事務局】

20万人の人口のうち、8万ぐらいが登録者数としてあるが、有効でいうと、4万。

【副委員長】

それは高い方かもしれない。
2割いったらすごいというぐらいかなという気がするが、それでいいのかという話で、その図書館に来ない人たちにアプローチするところに、テクノロジーを使っていった方が個人的にはいいと思う。

【委員長】

図書館でどういうふうに導入すればいいか、日本の場合は図書館でチャレンジしている数が少ないのではない。
か。いずれにしろ、これから目を離せない領域だと思う。
次に、事務局から意見のまとめについて説明いただきたい。

・令和4年度・5年度_台東区立図書館意見交換会_意見のまとめ

○資料4について、事務局から説明

【委員長】

今の説明について、個人的にはなかなかいいことを書いてあると思うが、これを実現するのは大変なこと。
私もいろいろところで話をさせていただくが、皆様方に理解をいただくのは大変なことで、これから事務局の方でやっていただくということになる。
こういうふうにまとめていただき、我々が申し上げたことが取り入れられてるので、いいのではないかなと思って拝見した。
住民の方と一緒に、意見を交換しながら収集を進めていく方法もある。国際図書館連盟においても、中高生が選書に関わることを推奨している。

また電子図書の種類にしても、収集方針とぶつかるところがある。
例えば、資格関連の問題集も、韓国などで導入したときは人気がすごかったが、日本の場合は図書館の資料収集で、資格向けの書籍や問題集は購入しないという方針のところがある。
まずその辺から考えていただかなければいけない。
電子書籍を導入する場合でも今までの収集方針の見直しなど、これから皆さんの意見を聞きながら取り組まなければいけない。
最後に一人ずつ今までの会議の感想や意見をいただきたい。

【副委員長】

一か所だけ。15ページの「共同的な学び」の「共同」の字はこれにするか、それとも、コラボレーションの協働にするか。

中を見ると両方のことが書いてあるが併記するか。

【事務局】

協力して働くの方にする。

【副委員長】

最近文部科学省もそちらの言葉を使って、その中にこの共同が入るというニュアンス。

【事務局】

協働も広い意味で使う。

【副委員長】

それがいいかもしれない。

【委員長】

では、最後に、一人ずつ発言をいただきたい。

【委員】

私は一年間の参加だったが、この二年間、機能強化ということをテーマに議論いただいた。
これから庁内の本格的な検討作業に移っていくが、いただいた意見を十分に踏まえながら検討作業を行っていきたいと思う。

【委員】

私の本職は、まちづくりや、本のある場所を作るという事業を行っているので、この会は年間2回と少なかったがとても勉強になる機会だった。

区民として参加して強く感じたのは、図書館に関する当たり前を、どんどん区民の方も変えていかなければいけないということ。

今の学校現場であまりDXが浸透してない、図書館とのギャップがあるなど、子供がそういうことに気づかないまま大人になっていく、古いイメージの図書館が残っていくのかなと感じたので、委員長と副委員長からいただける連動みたいなものが子供にとっても有用なのかなと思ひ、それをシェアする機会があると子供にぜひ知ってほしいと思った。

【委員】

このまとめを見て、議論したのは3回だが、かなりいろいろなことをディスカッションできたのだなと改めて思った。自分が生きている中では会わないような方たちと、いろいろな視点での話を聞けたということは大変ためになったと思っている。

この後、確かに実現化するところでは、どこに優先順位をおいてやるか、これだけの意見を全部やるのは大変だと思うので、そこをどう考えていくかはなかなか難しいと思う反面、区民の方がどこが一番必要なのかというところをぜひリサーチしていただき、そこからステップバイステップでやっていただくといいと思った。

【委員】

図書館で自分で選ぶのも大変だったが、ここへ来て検索などもできるようになったのでよかった。

もう一つは、いろいろなことができるのであれば、ぜひやって欲しい。

ただし、お金のことが非常に問題。

先ほど、ゴールをどこに向けるかというのは、区民が図書館へ来なくても見られる方式などがやはり必要なのだろう。

それをいかに皆さんにPRするのがいいのかというのが、私が印象を受けたこと。

【委員】

今、保育の中では本当に子供にとって絵本の大切さということ、保護者の方にも訴えたり実際保育の中にたくさん取り入れたりというようなところで接していることが多いが、保育園の役割として、まずは絵本が楽しいよということをしかり育てていくことが役割かなと思った。

そこをしかり担って、成長とともにいろいろな機能の新しい図書館を楽しいなど思ってくれたり関わってくれるようにしていきたいと改めて思った。

【委員】

学校が、もっと最先端を行っていただければいけなかったり、もっと世の中との関係と合わせていただければいけないなど感じたり、また、開いてはいるけれども閉鎖的な部分があるのかなとも、いろいろな方の話を伺って感じた。

私は専門が数学だが、数学の授業で一人一台端末を使って、デジタルの世界で図形を動かしたりする。

一方で紙を渡して、実際手で折りながら考える。

数学の世界で身につけさせたい力があり、その力を身につけるために、必ずしも端末がいいわけではないし、アプリがいいわけではないし、ソフトがいいわけではないのかもしれない。

その子にとっては紙を一生懸命折って、折り目がたくさんついている中で、数学的な見方や考え方を一生懸命身につける。

やはり、あくまでも一つの道具なので、そこへのアプローチとして、こういう端末を使うと、数学で身につけさせたい力がこう身につくよということを我々教員が実感できないと、なかなか端末に行かない、ICTに行かないというところがあるかもしれない。

最終的にはその子がどう成長するかとか、どういう力を身につけるか、そのために有効な道具かどうか、便利な道具かどうかということが、学校教員の中にはあるのかなというふうに思った。

そういうことをいろいろ考えさせていただく機会だった。

【副委員長】

ここに書かれていることはどこに出しても恥ずかしくないと思う。

さらっと書いてあることの中にとっても重要なこと、それから近未来を見通したことがかなり盛り込まれているので自信を持っていいと思う。

先ほどから出ているが、これを全部できたらいいが、なかなかそうはいかない。

もちろん優先順位をつけていくことが大事だが、一方で、リソースを増やすことも大事で、それには手は2つしかなくて、まさにこのまとめの「今後求められる図書館運営」に書いてある2点。

一個目は協働という考え方。

図書館あるいは区で全部やるのではなく、みんなでやる。

それは、個人でも区民でも、区の中にある会社でも学校でもグループでも、そういう人たちが運営に関わっていくというような視点でないといけない。

そうあって初めて図書館でできることが広がっていく。

もう一個はテクノロジーの力を借りるということ。

人間ができることは限られているので、テクノロジーをうまく使ってできることを広げていく。

図書館でやるべきことが広がっているの、それに対応して関わる人を増やすということと、テクノロジーでうまく広げていくということが大事かと思う。

ただ、そういう点で言うと、お金の話が先ほどからあったが、区の中だけで全部をやるのは限界なので、例えば先ほどのAIとかそういうDXの多くは、これから協働の利用モデルになっていく。

つまり、区の中で全部やるのではなく、東京都や大学と一緒にやるとか、いろいろなところと協働で運営していく、そういう方向で、いろいろな区と、あるいは市と他県も含めて協力していくことでコストも少し下がっていく。

そういうことも念頭に置いていただければいいかと思う。

最後にテクノロジーと言ったが、先ほどとても重要なことをおっしゃっていて、デジタルがすべてではないので、今の若者たちは、デジタルとアナログを対比的に捉えたり、リアルとバーチャルを対比的に捉えたりという感覚もない。

だから我々もテクノロジーを使えと先ほど言ったが、技術という意味なので、それは別にデジタルの技術とは限らないので、使えるものをうまく使っていく。

あるものをうまく生かしていくとことだというふうに捉えるといいと思う。
図書館はそこを大事にしてきたから、本もあるしデータベースもあるわけだから。
ぜひ、台東区発のモデルが、23区と言わず日本初としてこれから提示できていくことを祈っている。

【委員長】

副委員長がおっしゃったように、台東区の特徴のある、個性的な図書館のあり方というのを、いろいろと追求して
いただくと非常にいいのではないかなと思う。

やはり考えの一つは、住民の方が自分たちの生活や仕事、そういったものと図書館の活動が結びついていかないと、
図書館というのは発展しないのではないかなというふうに思う。

台東区というのは、商業のまちで、その特徴として商店街が非常にたくさんある。

問屋街などの話になると、台東だけ。

台東区は特色を持った図書館づくりをぜひこういったことを踏まえながら進めていただきたいと思う。

あと一つ、私は、中学生の調べ学習のコンクールの最終審査委員をやっている。

ある委員が、どういう資料を使ったのか、どの資料のどれを使ったのかを調べたところ、今年はインターネット情報
源と図書が大体50%50%。

去年は45%55%で図書が多かった。

ただ、その中でインターネットを非常によく使って書いた中学生が、最後に何て書いているかという、「今回の調
べ学習で本の大切さがわかった」と。

それはどういうことかという、本で調べてページをめくっていくうちに、自分が求めるところだけでなくその周辺
のこともいろいろ見えてきて、いろいろなことがわかる。

その周辺のことを知りながら、なおかつそういったことをいくつか組み合わせて自分で考えていき、自分の考えが
非常に多様になり高まっていくと書いていた。

ずばりこれがわかるというのがインターネットで、それだけを積み上げてもなかなかたどり着かない答えがあり、そ
ういったところにたどり着くのは、やはり本の大切さというふうに思った。

これから、アクティブラーニングの部屋などいろいろ作るというのは、実現するためにはいろいろと苦労されるだろ
うと思うが、ぜひこれからも事務局に頑張ってください。

【事務局】

図書館のリニューアルは、工事に入るのが令和7年9月から。

1年と少しの工事を踏まえて、令和8年12月をリニューアルオープンという予定となっている。

リニューアルに向けた検討というのはいろいろとしているところだが、リニューアルを進める中で、またリニューア
ル後の運営の中で、今回皆様方にいただいた貴重なご意見をできる限り反映できるように努めて参りたいと思っ
ている。

また、意見のまとめについては、DXをプラスさせていただき、後日送付する。

【委員長】

図書館もいろいろ注目されているので、ぜひ台東区も話題になるようになっていただきたい。

4. 閉会

以上